畜舎のハエ対策

梅雨に入り、気温・湿度が高くなると畜舎にハエが多く発生してくる。

ハエは、不潔・不快感を伴い、さまざまな病原菌（ポリオウイルス、チフス菌や赤痢菌など）を媒介するため、伝染病の発生要因となり、大発生をさせると近隣住民にも多大な迷惑をかけることとなる。そのため、早い時期からハエ対策に取り組むことが必要である。

①ハエの生態

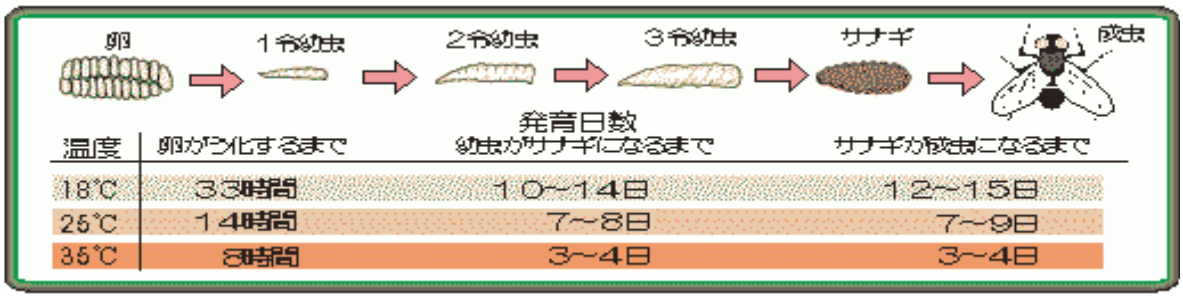

図　ハエの生態　（「家畜衛生情報」東濃家畜保健衛生所（平成２２年６月より））

ハエは通常、約２週間で卵から成虫となるが、気温が高くなると成虫になるまでの日数が短くなり、約１週間で成虫となる。成虫は１～２か月生存し、１回につき５０～１５０個の卵を５～１０回産卵する。対策を怠り放っておくとあっという間に爆発的に発生することとなる。

②効果的なハエ対策

ア　環境的な対策方法

ハエは一度発生すると、駆除が困難であるため発生をできるだけ抑える努力をする。

・除ふん、清掃、残餌の除去をこまめに行い、畜舎内を清潔に保つ。

・畜舎内の風通しを良くし、乾燥させる。

・ふんは発酵、乾燥させ、ウジを死滅させる。（発酵温度６０℃以上とする）

・週に１度は、発生源となる場所（尿溜め、排水溝、堆肥舎等）をチェックする。

イ　薬剤を使用した対策方法

ハエの発生するこの時期、薬剤の使用にあたっては、まず幼虫対策を行う。幼虫が発生しそうな場所に脱皮阻害剤（IGR 剤）を定期的に散布する。

ハエが目立ってきたら、IGR 剤の散布頻度を増やし、毒餌法や残留噴霧法、塗布法を併せて実施する。

ハエの大発生等の緊急時には空間噴霧を実施する。

また、薬剤耐性をもつ個体が発生するため、同一系統の成分が入った薬剤を連続して使用しないようする。

1)脱皮阻害剤（ＩＧＲ剤）

ウジの成長（脱皮）を阻害して、死滅させる薬剤。

遅効性であるため、見た目の効き方が遅い。１～３日齢幼虫の前期までに散布しないと効果が薄い。

2)毒餌法（ベイト法）

殺虫剤と蜂蜜や砂糖などを混合した餌を設置し、誘引殺虫する方法。

発生源対策と同時に行うと効果的であるが、大量発生した場合は対応が追い付かない。

家畜やペットの口に入らないように注意が必要である。

使用する薬剤は、カーバメイト剤、有機リン剤等。

3)残留噴霧法、塗布法

天井や壁柱等のハエが休息し集まりそうな場所に薬剤を噴霧または塗布する。

長期間残留し、効果も持続する。

使用する薬剤は、カーバメイト剤、有機リン剤等。

4)空中噴霧法

即効性のある薬剤を霧状にして、直接虫体に噴霧する。

使用する薬剤は、ピレスロイド剤。